



更級小校庭でチャレンジラン

今年5月から8月にかけて、更級小学校の校庭や周辺道路で、ランニング教室「さらしなっ子チャレンジラン」を5回実施しました。子どもたちに走る楽しさを教え、体力づくりをしておうと昨年から始まった企画で、今年には児童や保護者約60人が参加しまし

た。

平成18年に全国都道府県対抗男子駅伝大会で長野県チームを3連覇に導いた名監督の西沢民雄さん(仙石区)に企画段階から実技指導まで全面協力いただき、学校と地域が連携して実現したものです。

西沢さんを中心に地域の陸上関係者の指導により、回を重ねるごとに、子どもたちがどんどん成長し、走り方の基礎を身に着けるための地面を素早く強く蹴り上げる練習やミニハードルを使った練習にも楽しみながら取り組んでいました。8月に5回目が終了した後にも継続実施の希望が多く、9月におぼすてマラソン大会練習会を追加で2回実施しました。チャレンジランは地域の皆様の協力をいただき、これからも継続して実施し、将来、更級から駅伝やマラソン大会で活躍する選手が出ることを期待します。

現在、更級地域にあるさまざまな活動の継続発展が、地域のひととの関わりを通して、地域を知る・地域を学ぶ・地域を愛する子の育成につながり、子ども達の郷土愛を育み、さらには更級地域の地域力向上に役立つものと信じています。

(仙石区・島谷守)

リレー
里麗エッセー

縄文村にゆるキャラ誕生、ゆるびじゅん

羽尾四区・松本佑子

さらしなの里縄文まつりも、第23回を迎えました。更級小学校の児童、保護者の皆さまも参加するようになり、更級地区の代表イベントになりました。

私も長い間、服装係として参加してきました。最初のころは、参加人員に不足する服の枚数を調べ、近くのお店からいただいた紙の米袋をほどき、貼り合わせ、それぞれ自分の思いを絵の具で描きました。都合のつくメンバーに夜集まっていたいただき、まつりに当日までに仕上げました。大変でしたが、学生時代を思い出し、楽しい時間でもありましたね!

そして、昨年第22回まつり打ち合わせ会議の折、キャラクター作成を依頼されました。2枚の大きなフェルト布、数枚の色つきフェルト、縄文の雰囲気を出した



めに紋様の型紙を作り、大きささまざまな大きさのものを一枚一枚各部位に置き位置を確かめる。夜10時すぎて布への型は出来上がり、北村英子さんが家に持ち帰り、翌日すべての布をミシンで縫いつけてきてくださいました。私は、2枚の布の前後を縫い合わせ、首回り、裾、袖回りの仕上げをしました。最後に、誰が身に着けても合うように、片側はひも結びにすることにしました。

なんとか、まつりに間に合いました。参加してくださった皆さんの知恵と力は、出来上がった衣装に表れていると思います。まだまだ直さなければならぬ部分はたくさんありましたが、短時間で仕上げるのができたのは、皆さまが協力してくださったおかげと感謝しております。

また退職された荒井君江さんもこの作成に大変ご苦労されておりました。ありがとうございます。これからの縄文まつりの中で、みんなから親しまれ、愛されるキャラクター、「さらしな」になることを願います。



明徳寺 涅槃図 の 解説

お釈迦^{しやか}さんが亡くなる時の入滅^{にゆうめつ}の絵「涅槃^{ねはん}図」を前にして、塩崎の長谷寺住職夫人の岡澤恭子氏による絵解^{えげ}きが、羽尾の明徳寺客殿で七月四日に催され、たくさんのお聴衆が涙しました。主催したのは更級^{さらんど}人風月の会（会長・塚田正志氏）。更級地区には「さらしな里友の会」をはじめ、多数の市民活動団体があります。更級人風月の会もその一つです。月見会、講演会、演奏会などを、それぞれ年一回くらいのペースで開いており、講演会、演奏会ではいつも百人を超す人たちが集まります。今回は百二十人が集まりました。

たくさんの人の前で、大きな絵（通常は一枚の掛け軸）を使って話をする絵解き。字が読めない人がほとんどだった時代に、仏教の教えを広めるために、絵を携えて全国を歩く、説話僧などといわれる僧侶も現れるほど盛んな時代もあったそうです。本が手に入るようになり、映画や漫画、テレビ、パソコン、スマホの時代になって、絵解きの役割も終わったかに見えました。しかし、岡澤恭子氏の「口演」に接し、これは、いつの時代でも人の心をとらえる「芸能」だ、と思いました。単なる、お涙頂戴の内容ではありませんでした。また、勸善懲悪の道徳を教えるものでもありませんでした。涅槃図を

長谷寺・岡澤恭子さんの「口演」に感動、涙

前にして語ってはいませんが、お釈迦さんの入滅のお話だけではありません。口演の中心はむしろ、お釈迦さんが生きていたときのお話です。たくさんの人や生き物と一緒に生きてきたその結果として、死の床に伏したとき（涅槃）、たくさんの人や動物が集まり、それぞれのエピソードが語られるのです。

お釈迦さんが一人の人間としてどのように生きてきたのか。

アーナンダという弟子がいました。二十五年間お釈迦さんの身の回りの世話をし続け、説法をすべて聞き覚えていたほどの弟子でした。しかし、まだ悟りには至っていませんでしたので、死の床に伏せているお釈迦さんに、「どこまでもお伴をさせてほしい」と願い出ます。ところが、お釈迦さんは「ここからは私一人の旅、これからは私の話をともしびに生きて行きなさい」と断ります。話を聞き覚えるだけではだめで、自分で考え行動せよ、ということでしょう。

この絵解きは「講演」でなく、「口演」であることを実感しました。ユーモアで聴衆をなごませ、ゆっくりとした口調でわかりやすく、抑揚があり飽きることはない語りは、何度でも聴きたいと思いました。この感動をまた体験したいと。

（羽尾四区・塚原弘昭 明徳寺住職）

なぜ扇平の密教法具は、冠着山の 実像に迫れる重要なものなのか？

平安の都人にも「聖山」 だった可能性

友の会だより32号で、さらしなの里歴史資料館学芸員の翠川泰弘さんが冠着山の近く「扇平」という地名が残る山中で見つけた、古ければ平安時代末までさかのぼれる「密教法具」が、冠着山の実像に迫れる重要な手がかりと書きました。どうということなのか、詳しく知りたいたので翠川さんに聞きました。
(聞き手・大谷善邦)

Q 密教の意味を辞書などで調べました。自分なりにまとめると、中国で仏教を学んで日本に広めた平安時代初めの僧侶の空海や、最澄の教えということのようですね。だから密教法具は、空海や最澄との関係が濃く感じさせながら、仏の教えに近づく修行の道具だと思えました。

A 密教法具の中で一番目立つ鐘のようなものは五鈷鈴と呼ばれます。修行中に手に持ち実際に鳴らすもので、修行を始めるとき仏を呼び、また終わるときには仏を送るために鳴らしたそうです。

Q その密教法具がなぜ、冠着山の実像を解明するのですか。

A 冠着山の周辺には、



A 冠着山に寄せた当時の人たちのあつい信仰心が考えられます。それで32号では「聖山」という表現も使いました。

Q 自分にとって冠着山は、自分が何者なのか知るた

經典をあとの時代に伝えた、死者の供養をしたりする。死後のお経を土に埋めた経塚や、寺院の存在を示す地名などが残っています。そんな中で古ければ平安時代までさかのぼれる扇平の密教法具は大変重要で、さらに重要なのは、それが山の中で見つかったことです。平安時代はまだ、寺院の建築物は都のような有力地の平地にしかない時代です。そんな時代に、寺院も山中の扇平にあったとしたら、わざわざ山の中につく理由があったはずですよ。

Q その理由とは？

めにとっても重要な山です。信仰という言葉を使う自信はありませんが、この山がなかったら、この地でお墓に入りたいとは思わなかったでしょう。ところで、扇平が平安時代に密教の修行の場に選ばれた理由は？

A 扇平の地名が残る一帯は、周囲に比べて傾斜がゆるく、扇形に平坦地が広がっていることからの名とも考えられます。千曲川の流れも一望できる眺めもいい所で、冠着山の懐のような感じもあります。そんなことから冠着山を崇める聖地や霊地として扇平が選ばれた可能性もあります。

Q さらにさらしなの里歴史資料館ができる前に発掘された羽尾の円光房遺跡からも平安時代の建物の跡が出ています。それとの関連は？

A 建物には都の役人が立ち寄ったと考えられます。冠着山の情報が都に伝えられたでしょう。その結果、密教法具を山の中に置いておくのにふさわしい場所になった可能性がります。この法具が古ければ平

安時代までさかのぼれる訳は、同じ時代に埋納されたとされる和歌山県の那智山で見つかった密教法具と似ているためですが、実はこの密教法具の調査は十分には行われず、製作年代も特定されていません。専門家の力を借りてはつきりさせると、冠着山の実像がもつと分かってくるでしょう。

編集後記 冠着山の写真が千曲市の観光パンフレットに大きく載ることがよくありますが、実際、冠着山のことを市民がどのくらい知っているか。千曲市の多くの小中学校の校歌でも歌われる山。さらしなの里、そして千曲市のことを全国に伝えるには、もっと冠着山に注目した方がいいと思います。発掘をはじめ学術的な調査や報告が不十分であることが大きな課題です。今号から、さらしなの里にお住まいの方にお書きいただく新企画「里麗エッセー」がスタートです。

編集・発行
さらしなの里友の会だより
編集委員会
(事務局)さらしなの里歴史資料館
〒389-1081-2
長野県千曲市羽尾247の1
電話 026(276) 7511
Fax 026(261) 4161